

## 審査評

### 石川和男 (いしかわ かずお / 画家・独立美術協会会員)

今回も良く練られた作品が並び、小品である事を忘れて見応えを楽しませて頂きました。

彩度が高い色には明度が低いものが多く、パンチ力のある鮮やかさが魅力な反面、画面が黒ずんで見える性質もあります。特に小品ではその傾向が強まるので、青空・夕焼け・深緑を描く時など気を使うポイントになるでしょう。

以下、個々の作品寸評。大賞作の中村ひとみ氏は朝の日射しの表情を捉えて清々しい。菅野氏は適切な構図で深まる秋の静穏が心地良い。中村美律子氏の砂浜は広がりが見晴らしい。風紋だけで近景を成立させるも可。NAO氏は躍動感ある筆致で夏の生命力を活写。山本氏はメカと早苗並ぶ水田を対比させ瑞々しい。船井氏は遠い記憶の夢の一場面のような思い巡らす作。国光氏は近景の草むらから奥への描写密度配分が秀逸。下木場氏はわずかに見せる軒だけで空の高さを表現。横田氏は夜空のファンタジックな表現が楽しい。藤崎氏はぼかしと描写を技巧的に使い木漏れ日が大変美しい。松林氏は陰影の青系と白い船体や地面との対比で日盛を爽やかに言い切る。石堂氏は木立ちの間から覗く日の出が正に輝くよう。楠瀬氏は心象的な赤が鮮烈。増田氏は宙に浮いた大きなマッサが迫力ある。守田氏は繊細な色調が美しい。

他にも触れたい作者も多々おられますが、来年を楽しみに筆を置きます。



## 審査評

### 田所雅子 (たどころ まさこ / 画家・光風会会員・日展会友)

コンクールに出すなら、誰もが良い成績をあげたいと思うものです。特にこの jam 公募展は上位 38 人に入ると、全国の画廊 11 ヶ所を廻る巡回展で絵を飾ってもらえます。出品料を考えると、こんなに贅沢なコンクールはありません。それは主催してくださっている全日本画材協議会の方々の協力あってのことです。出来れば上位 38 人に入りたいものです。



コンクールは丸バツをつける形となりますので無情なものですが、入賞したから全部丸、落選したから全部バツということではないのです。技法や描写が巧くても絵の対象が訴えるものが弱いとか、描きたい気持ちは強いけどデッサン力や描き込みがもの足りないとか。これらのどちらも絵の中に込めることのできた作品が上位を得たのだと思います。今回の大賞も、その場の情景を描きとる描写力だけでなく、ご本人ならではの画面作り、絵に深みを持たせる題名選び、絵の一部として額にも気を配って、一つの世界を作っておられます。

コンクールに挑戦したことはご自分の成長に繋がります。入落関係なしに、「自分頑張ってるな」と自分を褒めてあげましょう。